

ふたたび大阪の旅

< 1 > また やってもうた

平成 23 年 5 月 25 日、久しぶりに早起きをして東京発 6 時 43 分のぞみ 201 号に乗り込んだ。車内で朝食を摂ってのんびりしていると、真っ白な富士が目に入ってきた。ここ数日雨模様が続いているが富士山は雪だったようだ。三年ぶりの大阪の旅、車窓から富士が見えると旅の幸先が良いような気がする。



晴れて暑くなりそうな気配。早朝の肌寒さに合わせた服装で出てきたので、新大阪駅のコンコースで一部着替えて大阪駅に移動。エスカレーター・地下街・雑踏・・・・。

エスカレーターに乗った途端に後ろからオバちゃんに猛烈に体当たりされた。そうだ、エスカレーターは右側通行なのだ。またやってしまった。郷に入れば郷に従わねばと意を決しはしたものの習慣と言うものは恐ろしい。何度か過ちを繰り返しながら段々にスムーズに右側に並べるようになってきた。

10 時、梅田阪急百貨店の開店を待ってトイレで散策スタイルに着替え、大荷物はコインロッカーへ。

< 2 > まずは山登りから

今回の旅の最初の目標地点に向かって出発。我が人生で初めての「大阪での山登り」になる。地下鉄の一日乗車券（850 円）を買って御堂筋線に乗り本町へ、中央線に乗り換えて大阪港駅へ。高架の駅から町に降りると、これまでとは一変した景色に目を奪われる。海に向かう道を進むと進行方向右手に大きな観覧車とバター臭いデザインの建物。東京で言えば台場を思わせるような景色に驚きながら歩いていると、自動販売機の側面に「犬かみ ます 注意！！」と書いた貼り紙があったり、立ち呑み屋の店の名が「乙女」だったり、バター臭さの中に大阪らしさが混ざっていて退屈しない。



右手の緑地に入ると行く手に階段がある築山が見える。これかなと思って登って見たがこれは休憩所。さらにその先に進むとなにやら石碑か標柱のようなものが建つ築山がもうひとつ現れた。

明治天皇の行幸記念碑が建つその足元に

「大阪 天保山山頂 4.53m」の標識とそのわずか手前の敷石の間に二等三角点もある。日本で一番低い山と言われている天保山だ。（右上写真）

天保二年に洪水の防止と大阪（当時は大坂か？）港への大型船の航行を可能にするため安治川河口の浚渫が行われ、その時の浚渫土砂を積み上げたことでできた小山で、後の世には砲台が設けられたりもしたらしい。

私の登山は 17 歳の春にスタートした。振り返って見れば第一フェーズは「高き山・深き山」を目指し、40 歳代後半頃から始まった第二フェーズは「低い山と歩き残した山」を探し歩いてきた。そして最近、第三フェーズのテーマとして「低すぎて問題にもしなかった山」へも行ってみようかと思いはじめた。日本山名事典などのいくつかの書籍を紐解くうちに天保山の存在を知った。とは言え、大阪の超低山を目指す前にすべきことありと考えて、この旅の二週間ほど前に「東京都で一番低い山と記録されている待乳山」にも登ってみた。

登山の後で、傍らに建つ観覧車から全景を眺め直して見ることを思いつき大枚 700 円を投じることにした。観覧車の中のガイドアナウンスは「地上からの高さ 112.5m は世界最大級」と繰り返していた。4.53 と 112.5 という二つの数字をならべてコメントすることは差し控えることにする。

< 3 > 宇宙から住之江へ

大阪港駅から中央線に乗ってさらに先へ進むと、線路は大阪港の海底に潜り込んで行く。(右写真：遠くに水平線)そして隣の島で再び地上に出ると中央線の終点「コスモスクエア」駅になる。

「なんじゃこの駅名は?」と思いながら駅前を歩くと街路樹の中の看板が目に入った。看板には駅名と駅への案内が書かれており、日本語・中国語・韓国語の三言語で書いてあった。良く見ると中国語の表示は「宇宙広場」となっていた。カッコよさを求めて迂闊に横文字の名前を付けると、それが外国人から誤解を受けることがある。近頃我が国に出回っている純日本製の横文字やカタカナ語の中にはこういう点で配慮を欠いたものが少なくない。

宇宙広場からニュートラム(無人のレールバス・・・東京で言えばゆりかもめか?)に乗り、次の目的地に向かった。ニュートラムの終点は住之江公園。



< 4 > 住吉さんへ、そして白昼夢

朝、目え覚ますと天気がええ、住吉さん(すみよっさん)でもお参りしよかと出かけた。お参り済ませて出てきたら、後から「も～し旦那さん」と声をかけられて・・・

酔っ払いの客が同じ話を繰り返す。「住吉駕籠」という落語を何度か見聞きするうちにこの下りが気に入り、また住吉大社ってどんなところだろう?と興味を持ち始めた。

地図で見ると住之江公園から住吉大社までは2.5Km弱しかない。ならばバスの便があるのではないかと思って、昼飯に入ったうどんやおちゃんに尋ねてみた。バス便があることがわかりバスターミナルへ行って見たら、親切なおばちゃんが行き先表示板や時刻表を見て教えてくれた。

「今行ったとこや、次のんまで小一時間あるで」

仕方なく四ツ橋線で難波へ出て南海電車で行くことにした。途中の岸里か玉出あたりで降りて南海の駅まで歩いてもいいかなと思いはしたが、面倒なので・・・

南海難波で駅員に尋ねると、七番線の電車に乗れと言う。ホームの表示は「普通 和歌山行」。

乗ってしまえば10分足らずで住吉大社駅。駅前通りから参道で、行く手に大きな鳥居と太鼓橋が見え、参拝気分が盛り上がる。(右写真)路面電車が走る道を横切れば住吉さん。立派な献灯が立ち並び、澄んだ青空に建物の朱色と桧皮葺きの屋根の色が鮮やか、砂利を踏んで歩く音も気持ちが良い。境内をぶらぶらと歩き回り大鳥居に戻ろうとしたら、左手に「御神田」と表示がある大きな湿地が現れた。田植え神事の準備だろうか、中央部に神殿を組み立てていた。



太鼓橋の下の水面を滑るように進む四羽のカモの群れに見入っていると、後ろから若い女性に声をかけられた。「も～し旦那さん」

振り返ると、後ろには誰もいない。浜寺駅行の路面電車が鳥居の前を走り抜ける音だけだった。

< 5 > 阪堺電気軌道

住吉大社の鳥居の前を走る路面電車はなかなかの味わいで乗って見たくなった。南海の住吉大社駅の隣からも始発が出ている。高架の南海線と商店街の建物との間に挟まれて申訳なように建つ駅舎にさらに目を奪われた。駅舎の表示が「右書き横書き」になっている、「驛園公吉住」。

「阪堺電気軌道阪堺線」というのが正式な名前らしい。200円払って天王寺行に乗車。

専用軌道を走ったり敷石のある一般道を走ったり、帝塚山の住宅地を抜けて商店街を走ったり、車窓の景色を楽しむのには充分すぎる。運転席のすぐ脇の座席でたっぷりと堪能した。

三年前に天王寺駅前の交差点の大きな歩道橋の脇に押しやられたように地べたに張り付いている阪堺電車乗り場を見て、妙な親しみを感じた。是非一度乗って見たいと思ったが、遂に実現した。(右写真)

天王寺に到着したら衝撃的な現実が待ち構えていた。駅前に大きく立ちはだかっていたその歩道橋が半分も残っていない。三年前に歩道橋の上から停留所と電車の写真を撮ったのだが、その歩道橋は道路のど真ん中でちょん切られている。天王寺駅前は目下再開発工事の真っただ中。交差点の往来にも不自由するぐらいに荒っぽく変化していた。

梅田のコインロッカーから荷物を出して淀屋橋のホテルにチェックインし、初日の予定は終了。



< 5 > 池田の猪買い

平成 23 年 5 月 26 日、少々寝坊をしてしまいホテルを出発したのは 10 時。旨い具合に雨天は先延べされたようで軽い日差しもある。今回の旅の二番目の目標に挑むには絶好の日だ。

井池筋から歩き始めた男が池田まで猪の肉を買いに行く。その間の出来事が面白可笑しく語られる落語「池田の猪買い」は、大阪の町中から池田までの各地が登場して面白い。この話のストーリーに沿って池田まで行ってみようと思いついたのはもう数年前のことではあるが、誰しも同じことを思い付くようで、今やインターネット上にも各種関係情報が公開されている。

主人公の男(名前はない)は、甚兵衛はんにおにに井池筋を北上して北浜で土佐堀川にぶつかる。(デボチン打つ)「橋ない川は渡れん」と左折して淀屋橋・大江橋・蜷橋の三つの橋を渡る。土佐堀川にかかる淀屋橋と堂島川にかかる大江橋は今でも立派な橋が残っているが、蜷川と蜷橋はもう存在しない。御堂筋の右側を歩いて行くと路傍の案内図に「蜷川跡」という表示があった。川があったと思しき路地の写真撮影をしてお初天神へ。

元々は湧水を祀った「露天神社(つゆのてんじんしゃ)」言われていたのが、近松の「曾根崎心中」でお初徳兵衛の道行の場になったことから「お初天神」と呼ばれるようになったらしい。余談だが、近松はこの神社で起きた実話をもとにして戯曲化したと言われている。鳥居の脇に小料理屋や怪しげなお店が並び、昼間だから歩きやすいが・・・というような所。出張で来た夜に何度かこのあたりを徘徊したことはあったが、あまり良い雰囲気のある街角ではなかった。しかし、遊興街が静まり返った早朝はなかなか風情のある境内だった。天神様の西門の前に「べにう」という寿司屋があると落語には出てくるが、今はそんなものはない。(右写真:お初天神正面)



阪急梅田駅に入り各駅停車の電車に乗り込んだ。梅田を出るとすぐに淀川を渡る鉄橋になる。

落語に登場する男は「十三の渡し(淀川)」「三国の渡し(神崎川)」と二つの川を船で渡る。渡し船なんか今でもあるのかな?と思いつながら車窓を眺めている内に鉄橋を渡った。岸边になにやら舟をもやっていると何箇所か見えた。どうも気になるのもう一度見直しをしようと思いつ、再び梅田行に戻りながら確認してみることにした。ところが何と(無知は怖い)、神戸線・宝塚線・京都線の三線が複線で走るこの区間、真ん中の線路を走ったら窓から川面が見えない。(右写真:梅田～十三間の三複線)



今度は頭を使って・・・、梅田から京都線の河原町行に乗り車窓から無事撮影をして十三の渡しは終了。見えた景色が渡し船の乗り場だったかどうかはどうでもいい、それらしいものを見たということで次のテーマに入ることにした。宝塚線普通電車の行先表示は、「雲雀丘花屋敷」。漢字が六文字も並ぶと中国へ来たような気分だ。昨日はカタカナの駅名に驚き、今日は漢字の駅名に驚き・・・。

十三の渡しを二往復してしまったので、時間の節約のため三国の渡しは車窓からとする。

「十三の渡し・三国の渡しと二つの渡しを越えて・・・、服部の天神さん・・・」
服部の駅を降りて東側へ200mほどのところに服部天神がある。天神さんは街道に面しているので駅から行くと裏口から入ることになる。一旦表へ出て再び入り直すという詣で方になった。(右写真：服部天神正面入り口)



服部天神の起源は「大陸から機織りが日本に入ってきた」ことにあるらしい。後に菅原道真が大宰府に下る折、この地で持病の脚気に悩まされて歩くことができなくなった。土地の人の勧めで路傍の小祠に詣でたところ良くなり、旅を続けることができるようになった。こんなことから「菅公脚気平癒の靈験」が広まり服部天神となったとのこと。草鞋や履物が数多くぶら下がっている訳がわかった。

服部から二つ目の駅が岡町。駅のすぐ東隣に鬱蒼と茂った神社があるので入ってみた。これも服部天神と同じように駅から入ると裏口になる。表に回って見ると原田神社。西暦600年代後半の創建というから随分古いものようだ。本殿は国の重要文化財に指定されているとのこと。

広く明るい境内を散策して次の目的地(本日のゴール地点)池田へ移動。

池田は北側に山を従えた町で、住宅地は傾斜して少しずつ山に向かうようになっている。

「服部の天神さんを尻目にして岡町から池田・・・、池田と言っても町中ではいかん、山の手へかかって、山獵師の六太夫さんのとこへ行きなはれ」と言われた男は山に向かって歩き出す。綿をちぎって投げたような雪が降り始める。(右下写真：池田駅から猪がいる山の手を望む)

駅の外に出るといきなり「らくごミュージアム」という看板や幟が目に入ってきた。どうやらこういうものがあるらしい、行ってみるか。栄町一番街・二番街と名がついたアーケードを抜ける途中で昼飯(今日もうどん)を食べて、アーケードを抜けると旧街道のような所へ出た。昔ながらの作りの家や、新しい建物ではあるが街並みの美観上古い建物の持つ雰囲気に合わせてものと思われるものが並ぶ。その昔何かの商売をやっていたと思われる大戸と木戸がある家があったり、羽目板の渋い色が美しい家があったりで歩いていても飽きることがない。



らくごミュージアムは二階建て、一階には月に一度寄席を開くという高座と展示スペース、二階には落語関係の視聴覚室。展示スペースのテーマは「落語に出てくる池田」と池田市が肩入れしている「社会人落語選手権大会」と「桂三枝」。ちょっと箱物作りにこだわり過ぎたかな?と感じさせるような印象だったが・・・、とりあえず15分ほど楽しませてもらった。背後には五月山という山が控えており、山を辿って行けば箕面の山に繋がっている。昔は猪が出たんだらうなど思えるような地形に納得しながら持ってきた地図を眺めて見たら、池田市と西側の川西市の間を流れる川の名前が猪名川となっていた。

川西能勢口まで行ってから梅田に戻った。ホテルでシャワーを浴びて着替えてすっきりし、懐かしき友との懇親会食の場へ。

< 6 > 野崎詣りは電車に乗って

平成23年5月27日、大阪の旅最終日、9時にホテルをチェックアウト。幸いにも今日も昼間は雨が降らないようなので残りの時間を使って野崎詣りをすることにした。

大阪駅のコインロッカーに荷物を預けるために御堂筋を梅田に向かって歩き始めた。昨日は右側を歩いたので今日は左側を歩くことにした。梅田新道の交差点の近くで、左手の路地の分岐点のビルの壁にめり込むようにはまっている石柱が目にとまった。石柱には「しじみはし」と書いてある。大阪駅で荷物を預けてから大急ぎで戻って写真撮影。

北新地駅まで歩き JR東西線・学研都市線（昔の片町線が立派な線になって市内を貫通している）で野崎へ。乗っている時間はわずか 20 分ちょっと。

野崎の駅頭に立つと細い掘割に赤い欄干の橋、橋の下には鴨の親子。駅前広場を抜けると野崎観音参道と表示がある商店街。八百屋のおばちゃんの威勢のいい声が響く生活臭のする町。

ところが 200m も進んで道路を一本横切ると閑静な住宅地になり、その間を広くもなく狭くもない道が一本、正面の山に向かって上っている。「野崎観音」の表示に引かれるように緩やかな傾斜を登って行くと突然木立の中に急な石段が現れる。（右写真）

数えながらゆっくりと登って行ったが途中でわからなくなってしまった。200 段ぐらい登った所に本堂がある。

野崎観音の正式名称は福聚山慈眼寺（ふくじゅさんげんじ）、曹洞宗の禅寺であり、「縁結び・安産・子授けの神」とされている。今日ここに詣でているお客さん達（自分も含めて）の姿を見る限り、これらの主だっただご利益とは無縁な人が多そうだ。

昔は大坂の町中から船で川を遡って行くコースと、陸路を歩いて行くコースと二つが存在した。このため、土手を歩く参拝客と川船で上る参拝客との間で罵りあいをした。これを落語にしたのがお馴染みの喜六と清八が登場する「野崎詣り」。JR野崎駅からえっちらおっちら歩いてきた我々にはこの漸のような滑稽な体験はできない。

ここも近松ゆかりの場所で、女殺油地獄の舞台になったところ。本堂の右側の奥に「お染久松の墓」があった。長い石段を下って野崎駅に戻ったが、まだ昼飯には少々早そうなので京橋まで行くことにした。



< 7 > 変わり過ぎた大阪駅

京橋で旨そうなカレーライスの匂いに引かれて昼食をとり、食後の多少の昼寝も・・・と思い環状線を逆回りで大阪駅に向かった。この旅の締めくくりに、のぞみ 238 号（15 時 27 分発）に乗るまでの残された時間を利用して「改装された大阪駅」を味わってみることにした。

これまで梅田貨物駅だった場所の一部に高層ビルが立ち並ぶ北口が広がった。梅田の地下街が北口にも広がり、どこまでもどこまでも地下道だけで進んで行けるようになった。しかしその反面、地下街を熟知していない異邦人には応用動作が効きにくい難しさもある。人間は目標の方角を見定めて歩き、目標物を見ながら進むという特性があるのだが、「どちらが北かわからない地下街」で「目標とする建物が見えない迷路」を歩くのは大変なことだ。そんなことを思いながら歩いていたら、傍らの二人連れの関西弁のおばちゃんが道に迷ったらしく通行人に聞いていた。

ずらりと並ぶプラットホームをガバと跨ぐように鉄骨の橋梁と屋根のようなものが架けられ、北口と南口が一体の構造物になっていた。北口は「ノースゲート」南口は「サウスゲート」とこれまたバター臭い名前になり、その間を結ぶ広々としたコンコースができた。（右写真）コンコースの北側の長いエスカレータを乗りついで行くと高層ビルの上層階に潜り込むように上って行くことができる。行ってみたらそこにはシネマコンプレックスがあった。



新しくなった大阪駅は、大阪またはその周辺から来たと思われる（聞こえてくる言葉から）物見遊山の客でごったがえしていた。

大丸・阪神・阪急の百貨店の食品売り場に入ると生活臭のある土産が買えるので、出張の帰り道で立ち寄るのが楽しみだったが、そういう雰囲気もかなり薄れている感じがした。

中央の大改札口の前を走る「中央コンコース」、「桜橋口と書いた矢印に導かれて歩く薄暗い通路」、私の頭の中の大阪駅はまだ昔のままなので、少々迷いもし圧倒もされた。

< 8 > 旅の終わりに

大阪は出かける度に大きく変化している。都心部の再開発が進んで高層ビル化がかなりの速度で進んでいる。

巨大な地下街が構築されて、これまでの街づくりは「地下の有効活用」にあったが、最近進められている街づくりは高層ビル化が示すように「垂直空間の有効活用」にあるように感じる。

長い歴史を遡ってもわかるように、河川・運河の開削や大きな道路作りなどを始めとして大阪の街は画期的な変化を繰り返してきた。大胆な街づくりの発想がこの土地に染みついているのだろうか、この点では東京に比べると動きの大きさを感じる。

この新しい動きの陰に「古い大阪」が随所にきちんと残されているのには感心する。(右写真：今橋三丁目 銅座跡)

また、新しくできた(近代的な?)建築物のユニークなデザインにも驚かされる。



「巨大な地下都市」と「林立する高層ビル街」は「想定外の規模で訪れる天災」に対してどの程度の強さを持っているのだろうか？

大震災で身の危険を感じる体験をしたばかりで「少々臆病になっている首都圏人」としては、「凄い街・大阪」への畏敬の念とともに、「天災への備え」という観点で多少の不安を隠すことができなかった。

以上